

Classics of Philosophy in Japan 5

戸坂 潤

現代哲学講話



CHISOKUDŌ

PUBLISHED BY Chisokudō Publications
Nagoya, Japan
<http://ChisokudoPublications.com>

SERIES Classics of Philosophy in Japan, 5
© Chisokudō Publications, 2017

COVER DESIGN Claudio Bado

ISBN 979-8377217169

JAPANESE TEXT

The interlinear numbers in the text refer to the pagination in the original edition of Tosaka Jun's *Complete Works*:

「現代哲学講話」『戸坂潤全集』勁草書房、1966年、3: 1-218.

目次

現代哲学講話

序 1

〔旧版〕『現代のための哲学』序 4

第一編

一 社会に於ける自然科学の役割 7

二 自然科学とイデオロギー 28

三 ヘルゲルと自然哲学 62

四 自然弁証法 79

第二編

五 社会科学に於ける実験と統計 95

六 歴史と弁証法	109
七 イデオロギーとしての哲学	123
八 日常性の原理と歴史的時間	150

第三編

九 新聞の問題	167
一〇 新聞現象の分析	188
一一 アカデミーとジャーナリズム	231
一二 批評の問題	246

第四編

一三 哲学評論	269
一 思想的範疇論	
二 京都学派の哲学	
三 田辺哲学の成立	
四 ソビエト同盟の哲学	

	一四	哲学の話	304
〔付一〕		世論の考察	333
〔付二〕		ファシズムのイデオロギー性	341

序

私は今現代哲学について、教師風の説明を与えることを目的としているのではない。無論おのずからそういう結果になった部分もあるし、またそうなることを避けねばならぬ理由もないのだが、しかしいつも私にとつて、もっと遙かに大事な問題は、我々が実際に生活しているこの現在の社会に触れて発生するところの、時事的なあるいはまた原則的な問題なのであって、こうした時事的または原則的な問題をば、時事的で且つ原則的な形で（そしてさし当りこれが本当の「哲学的」という言葉の意味でなければならぬと思うのだが）解決してみようという企てなのである。ここに集めて分類した論文の内容は決して自信のあるものではないが、しかし今いったその意図においては、決して曖昧ではないと思う。

現代の時事的また原則的な問題を哲学的に取りあげようというこの意図を、簡単にいって、「哲学的評論」または「科学的批判」と呼んでもいいだろう。かつて文明批評とか文化の批判とかいわれたものも、実はこういう形によって理論としての資格を有てるようになるのではないかと考える。もっとも哲学は科学からどう異なるかというようなスコラの質問も出るかも知れないが、私がここで問題とする哲学というのは、文芸や科学またその他の社会現象と並んで、何かの態度に立って批評される一対象物に過ぎないようないわば哲学プロパーを意味するのではなく、かえってそうした一切の現象を批判の対象とするような、生活の一種の態度そのもの、あるいは少なくとも思想の態度そのものを意味するのである。つまりここで問題になる哲学は、統一的な推進力を持った「世界観」から始めて、普遍的で科学的な、すなわち実際のな解決力を備えた

「方法」までを、意味している。哲学プロパーは、こうした「哲学」によるところの批判にとつて、必要な参考資料ではあるが、他面その単なる一材料に他ならないともいえる。

世間のある人達は、生活に於ける「思想」の意義をあまりハッキリと捉えていないようである。だが思想は決して単なる観念や何かではないので、世界に対する我々の生活反応（それが「世界観」というものの意味だ）であり、またこの生活反応において発生する問題の解決の唯一の手段（それが「論理」というものだ）なのである。哲学はこうした意味において思想なのだ。ところで、一切の現象に対応する観念には、必ず思想が潜んでいる。この思想によつてこうした観念は生きまた客観に対応する客観性を持つのである。文芸現象などにおいては近來この点が最も強調されていいのではないかと思う。

統一的な推進力を持った世界観、普遍的で実際のな解決力を備えた方法、といったが、俗間の多くの批難と注文とに拘らず、私は今以て、あるいは寧ろ近來ますます、透徹した「唯物論」だけがその資格に値いする唯一のものであることを経験しているのである。ただこの書物などに現われている限りでは、唯物論のこの透徹力に追隨することが、遠く私の思想的エネルギーの及ばないものであることを示してはいはしないか、を恐れるだけだ。

ここに載せた論文の内には、今ではかえつて私自身反対しなければならぬような見解も含まれている。例えば第一編の「自然弁証法」などがその最も著しいものだ。これについてはまだ充分に私見を決めかねているが、仕事の上での友人達や敵対者さえこの助言を利用して、ひとりこの問題に限らず、フランクに客観的に自分の思想水準を高めることに力めたいと考えている。読者には、この本から充分な問題の解決を期待して貰つては困るのであるが、しかしここに緒口を見せているだろういくつかの示唆が読者の眼に止まるならば、その示唆を実現するに役立つような、意味のある批評を下して欲しいと願っている。

これはかつて二年程前に大畑書店から『現代のための哲学』と題して出版したものの改版である。「世論の考察」・「フアシズムのイデオロギー性」・「共通感覚と常識」・「純文学の問題」の四つは、あまり特殊な問題に渡った小論文なので、これを除いて、代りに「哲学の話」という講話風の文章を入れた。書物全体の表題を『現代哲学講話』と改めるにこれが相応しいだろうと考えたのである。

第一編は主として自然科学に関し、第二編は主として社会科学に関し、第三編はジャーナリズム現象の理論的分析であり、第四編は哲学自身に関するものである。

一九三四・一一 東京

戸坂潤

〔旧版〕『現代のための哲学』序

これは現代に於ける若干の基本問題について試みた、「哲学的評論」である。かつて文明批評とか文化批判とか呼ばれたものは、現代では、社会の一般的危機の自覚の下に、マルクス主義的イデオロギー理論となつて現われている。この理論はであるから、単に社会科学の重大な一問題であるばかりではなく、同時に現代に於ける進歩的哲学に課せられた最も広大な課題でもなければならぬ。哲学はここで、単に一つの専門領域の科学としてばかりではなく、それよりも先に、進歩的で統一的な世界観として、時代の本当に科学的な批評の道具として、役立つことが出来、また役立たねばならない。こういう点を目指している意味で、この書物の内容は、哲学的評論と呼ぶに相応しいだろうと考える。

無論ここに纏めたものは、私自身の経験がかなり制限されているために、取り上げるべき多数の重大な基本問題を取り上げる事が出来ず、また取り上げる事の出来た問題についても、その触れ方が充分に立ち入ったものとは限らなかつた。そればかりでなく、ある論文については、今日の私は積極的にその誤謬を指摘したいとさえ思っている（例えば「自然弁証法」に於ける考え方の如き）。——だが私はこれ等の論文を通して、自分の誤謬を克服し自分の制限を踏み越えようとして来たのだし、またこれからもそれを怠らない積りでいる。で読者はこの書物から、諸問題の結論めいた解決を期待してはならない。これは寧ろ問題解決への示唆のために書かれたのだ。

現代のための哲学的評論Ⅱ科学的批評を行なうために何より必要なのは、理論家ないし哲学者と、各専門諸科学者との、

意識的な共同作業である。もつともそういう言葉は誰でもいいようなことであるが、今いふのには一定の客観的な内容があつてのことである。現代ほど諸科学（文芸はいうまでもない）がそれぞれの専門の関心そのものからして、哲学的世界観を必要とし、またその必要を自覚せざるを得なくなつた時代はかつてなかつた。科学者は理論家ないし哲学者に向かつて様々な根本問題の解決方を委任しつゝあるのである。ところが理論家ないし哲学者はこの委任に役立つにはあまりに不用意であつたか、あるいはあまりに立ち後れがしてはしなかつたか。現代のための進歩的哲学は、この立ち後れを取り戻し、直ちに役立つべき範疇を用意しなければならぬ。そういう急務を帯びている。だがこの急務を遂行するに必要なのは、他でもない、諸専門科学へ哲学自身の手をさし伸べるといふことではないのである。専門諸科学と哲学的理論とのこの必然的な共働は、哲学的評論に科学的批評にとつて原因でもありまた結果でもある。

第一編は自然科学関係の問題について、第二編は社会科学ないし哲学関係の問題について、第三編はジャーナリズムに関する問題について、第四編はこれ等のものに関する時事的批評と示唆的な試験と時評である。——「社会科学に於ける実験と統計」と「新聞現象の分析」とは新たに発表するものである。

一九三三・一 東京

戸坂潤